

be report

パラリンピック、悩ましいクラス分け

パラリンピック競技の障害種別とクラス分け

陸上競技(競走・跳躍)の場合		アルペン競技の場合	
種類	クラス数	種類	クラス数
視覚障害	3	下肢障害	4
知的障害	1	立位	5
脳性まひなど	4	上下肢障害	2
車いす	4	下肢障害	5
立位	4	視覚障害	3
低身長	2		
足義足無し	3		
切断・機能障害	3		
腕	3		
車いす	4		
足の切断	4		
	義足あり		



ヨハネス・フロアス
両足義足(ひざ下切断)



村岡 桃佳
座位(下肢障害)

公平に競う 細分化か統合か

パラリンピックでは障害の程度が競技結果に影響しないよう、選手をクラス分けしている。独自の規則だが、近年は細分化が進んだ反動で、人数が一定数に満たず参加を阻まれるケースも出ている。公平性の担保と参加者の裾野を広げるバランスはとら取るべきなのか。インクルージョン(包摂)を重視する大会は大きな課題に直面している。

今年3月に開かれた北京パラリンピックのバラスノーボードクロス。女子SBI-L2(下肢障害、軽度)の障害者クラスで銅メダルを獲得したフレナ・ハッカビー(米)は「ここで競えたことは感謝している。でも、色々ありすぎてうまく消化できていない」と複雑な表情を見せた。

右足を切断した彼女は、普段は最も重いクラスのSBI-L1(下肢障害、重度)に出場する。2018年平昌大会でも、クロスとバンクドスラロームのL1で金メダルを獲得した。だが、北京大会では、普段よりも一つ障害の軽いクラスL2に出場した。なぜか。

19年6月、北京大会の競技種目からバラスノーボードのうちL1の2種目が除外されたことがきっかけだった。大会の実施条件として、19年の世界選手権で、最低でも3カ国・地域から計6選手以上の参加が求められたが、2カ国ずつ選手にとどまり、条件をクリアできなかった。

大会への出場を望むハッカビーらは、男子のL1か、女子のL2へのエントリーを希望した。しかし、国際パラリンピック委員会(IPC)などから規定で認められないと却下された。

出場権を巡る争いは法廷へ。IPCの本部があるドイツの裁判所は一度はIPC側を支持したが、今年1月、上級審で選手側の主張が通った。

不利な状況でも 出たい選手いる

大会には、ハッカビー以外にも、セシル・エルナンデス(フランス)が女子L2の2種目に出場し、クロスで金メダルに輝いた。普段のクラスはL1だ。ハッカビーはバンクドスラロームで優勝した。2人には、不利とみられたハンデは感じられなかった。

ハッカビーは訴える。「障害の重いクラスの選手が一定数に満たない場合、ワールドカップでは軽いクラスに出ている。ほかの選手も承知している。不利な状況を受け入れても出たい選手がいるならば許可してほしい」

国内でも引年東京大会を前に、パラトライアスロンの谷真海のクラスが競技人口が少ないとして、東京大会で実施されないことが決まった。谷はその

実施する競技の 入れ替えあっても

IPCは、クラス分けを細分化することで、公平性を担保してきた。だが、細分化が進めば、選手数人で表彰台を争う事態にも発展しかねない。

参加人数が少ない冬季大会は特に深刻だ。1998年長野大会のアルペンスキー一回転男子は障害の種類、程度別に9種目が実施され、1種目あたりの参加人数の少なさを、メダルの多さなどが批判された。

そこで、2006年トリノ大会から、細かく分けていた個人種目を、座位、立位、視覚障害の3つのカテゴリりに統合し、障害の重さに応じた係数をタイムに加えて公平性を保った。これらの変更で、長野大会で12とあった金メダル数は、北京大会では78に絞られた。さらに、距離スキー男子スプリント座位では、5クラスの38選手が一つの金メダルを争った。

夏季大会は近年、競技数や選手数が増加している。バラスノーボードがハビリから競技へと格段変わったことが要因の一つで、クラスを統廃合する流れも加速する。選手の中からは「大勢の選手たちと戦って、メダルを争いたい」と歓迎する声も出ている。

競技面での公平性を担保しながら、参加者の裾野を広げるにはどうすればよいか。障害者スポーツに詳しい日本福祉大学の藤田和昭教授は、「一筋縄ではいかない」と指摘する。「二人ひとりの障害は異なるため、厳密さを追求すれば、二人1クラスに行き着いてしまうから、競技レベルを上げるには、同クラスに限り多くの選手がいる、競い合えることが重要だ。一方で、障害を負う人の数が増える方が良いわけではない」。

パラリンピックは多様性を認め合い、共生社会の実現を掲げる大会でもある。藤田教授は「パラリンピックを見る。世界の人の気持ちを揺さぶる。障害があってもみんなできる」と示す。その目的が達成できるなら、大会ごとに実施競技の入れ替えがあってもいいのではなか」と話す。

(福田寿生、藤原一生、松本麗恵)